

情報通信審議会 情報通信技術分科会 ITU部会(第18回) 議事概要

1 開催日時及び場所

令和3年12月2日(木) 13:30~14:50

於、オンライン会議(Webex)

2 出席者(敬称略)

(1) 委員等

部会長:三瓶 政一(委員)

部会長代理:伊丹 誠(委員)

委員:江崎 浩、大島 まり、上條 由紀子

専門委員:浅野 弘明、今井 朝子、内田 信行、門脇 直人、上村 治、川添 雄彦、
 鋤吉 薫、古賀 正章、後藤 良則、芹沢 昌宏、武田 幸子、寺田 健二、
 西岡 誠治、橋本 明、藤本 正代、前田 洋一、宮地 悟史、山本 秀樹

(2) オブザーバー

ITU-T 有識者:荒木 則幸(NTT)、一色 耕治(NTTアドバンステクノロジー)、高谷 和宏(NTT)、
 三宅 優(KDDI総合研究所)、山岸 和久(NTT)

(3) 総務省

田原 康生(国際戦略局長)、山内 智生(大臣官房審議官)

(4) 事務局

山口 典史(通信規格課長)、重野 誉敬(通信規格課国際情報分析官) 他

3 議題

(1) 世界電気通信標準化総会(WTSA-20)について

(2) ITU-Tにおける検討状況概要

(3) その他

国際電気通信連合電気通信標準化局長への立候補について

4 配布資料

資料 18-1 世界電気通信標準化総会(WTSA-20)準備状況について

資料 18-2 ITU-Tにおける検討状況概要

資料 18-3 国際電気通信連合電気通信標準化局長への立候補について

参考資料 1 ITU 部会 構成員一覧

5 議事

(1) 世界電気通信標準化総会(WTSA-20)について

資料 18-1 に基づいて、世界電気通信標準化総会(WTSA-20)について事務局から説明を行った。主な質疑・意見は以下のとおり。

三瓶部会長：

産業界の関与の重要性については、ITU-T 特有の課題とも思われる。ITU-R の場合は、3GPP のような詳細規格を作る標準化団体との役割分担が比較的上手く機能しているが、ITU-T では標準化団体との棲み分けが上手くできていない現状がある。有線・無線の融合が今後進んでいく中で、ITU-T のあり方が変わっていく必要があると思う。

また、これまで産業界の関与が薄かったことには何らかの理由があると思うが、その理由をクリアしようという議論は既にあるのだろうか。

事務局：

我々も ITU-T においては棲み分けが明確でないと感じている。仰るとおり ITU-T のあり方は変わる必要があると認識しており、総務省としても産業界がさらに関与できるよう取り組んでいく。

今井専門委員：

欧米が産業界からの ITU-T 参加者の少なさに大きな懸念を示していることがよくわかった。では、産業界の標準化活動はどのような機関で主に行われているのだろうか。

事務局：

ITU はいわゆる「デジュール標準」だが、欧米ではどちらかといえば 3GPP などの「フォーラム標準」に注力している印象を受ける。今回、欧米から ITU-T への産業界関与についての提案があった背景には、日本よりも欧米の企業で産業界の撤退が早かったと分析している。

また、IEEE など古くから連携している分野については役割分担ができて一方、スマートシティや IoT 関連で oneM2M という新たな団体が設立されており、いかに重複を排除しつつ連携していくかという課題が生まれている。

今井専門委員：

産業界が撤退していくと実効性が失われるのではないか。日本としてはどのような方針で今後 ITU-T に参加していくのか。

事務局：

日本にとって好ましくない勧告案に対して、政府として反対すべき案件については総務省が

ら積極的に発言を行う必要がある。一方で、どのような技術を標準化し、どうビジネスにつなげていくかは民間ビジネスに関わるお話であり、民間企業の方々のご協力が必要であると認識。

以前の ITU 部会においても紹介させていただいたが、今後の Beyond 5G における戦略については総務省が旗をあげて進めていく必要があると認識しており、「Beyond 5G 推進コンソーシアム」や、「Beyond 5G 新経営戦略センター」を設立している。まずは Beyond 5G という分野について産学官で連携し知財・標準化を推進しているところである。

三瓶部会長：

ITU-T でつくる標準規格がグローバルビジネスを展開する上で必須のものであれば民間からの参加があるはずだが、参加しなくてもデファクトで標準規格ができてしまう分野については ITU で作業されないというのがデファクトの流れ。

ITU-R の場合には、グローバルビジネスを展開しながら競争していくという構図がうまくできている。また、周波数スペクトルについては国際的に協調する必要がある、様々なかたちで民間からの関与がある状況。

ITU-T は、グローバルビジネスのために手を携えなくてはいけないという要素がないと、民間が関与しない流れになってしまうのではないか。Beyond 5G 分野などで、デファクトだけでは上手くいかないという部分が生じたときに ITU-T の機能が必要になるのだろう。ITU-T の中でこのような議論がされる必要があると考えている。

藤本専門委員：

パンデミックの新決議提案について資料に記載があるが、行われた議論等について、どのようなものかイメージしやすい例などはあるか。

事務局：

新決議提案については ITU-T としてパンデミックに対してどう貢献がしていくかを議論していくものであり、既存の勧告のうちパンデミック対策に有用なものをまとめる内容になっている。

現在進行中の議論として、ISO/IEC でもワクチンパスポートの標準化等の議論が行われており、ITU でもワークショップの開催などの活動を行っているが、国ごとに温度感に差がある。

三瓶部会長：

コロナ禍でのパンデミック分野の議論は Beyond 5G でも議論されている内容でもあると思うが、説明のあった新決議提案はこれまでの対応を含めたものをまとめるという提案なのか。将来の Beyond 5G に向けた新たな対応は含まれていないのか。

事務局：

今回の新決議提案に関しては、元々ITU-T のスコープを拡大させる内容が含まれていることを懸念し、過去に作成した勧告のうちパンデミック対策で有用なものまとめ、足りないものを見つけていくという既存の活動の範囲に抑えるよう主張した。

また、同様にアラブやアフリカからもパンデミック関連提案が出されており、いかにして3つの提案を調整するかという議論がWTSA で行われる見込みである。ITU-T の作業範囲を広げないようにしつつも、COVID-19 対応に関してネガティブなメッセージにならないよう対処したい。

(2) ITU-T における検討状況概要

資料 18-2 に基づいて、ITU-T における検討状況概要について事務局から説明を行った。主な質疑は以下のとおり。

三瓶部会長：

TSAG ラポーターグループでの SG 再編議論では熱い議論が交わされているのか。

前田専門委員：

非常に難しい議論となっており、SG 再編のために設立されたコレスポネンスグループ内で集中的に議論をしている。193 の加盟国のうち多くを占める開発途上国の意見をどのようにして反映するか。また、ITU-T の枠組みを中国等が積極的に活用しようとしている中で、より産業界の要望に合うためには国際戦略的にどうすべきか、日本として考える必要がある。

三瓶部会長：

SG15 の 5G モバイル基地局における時刻同期について、ばらつきを抑える方法と絶対時刻を同期させる方法があると思うが、どのような議論で時刻同期を行うものなのか。

荒木氏：

世界標準時から取得した時刻も参照することによって、絶対時刻の概念も取り入れている。なおかつ、GPS を使った位置情報も合わせることで、できるだけ同期の誤差を小さくする取組を行っている。まだ 5G 勧告化の要件を満たすところまでは進んでいない状況である。

三瓶部会長：

各地点での絶対時刻の完全同期はどのようにするのか。

荒木氏：

基本的には伝送装置間の E2E で時間を合わせ、さらにクロック周波数と絶対時刻と位置情報の組み合わせで誤差を小さくしている。

今井専門委員：

現在、教育現場ではインターネットをかなり利用しており、様々な新たな技術が出ているが、

ラストワンマイルのところまでは完全には届いていないと感じる。例えば 1000 人の生徒が一斉にインターネットにアクセスするような環境でネットワークを構築して管理する必要が生まれ、様々な学校等で苦労されている。Beyond 5G に向けた話が出ているが、なかなか現場では恩恵を受けられていない状況がある。これに対する規格、専門家からの提案、教育全体に対する提案等、作る検討があれば教えていただきたい。

事務局：

教育関係では技術面より実装面の課題が大きいと考えており、ITU-D ではギガスクール系の話があり、PC や学校インターネットをどう配備するかといった議論を行っている。どちらかといえば途上国向けであり、標準化には至っていない。

(3) その他

資料 18-3 に基づいて、国際電気通信連合電気通信標準化局長への立候補について事務局から説明を行った。質疑・意見等はなし。

以上